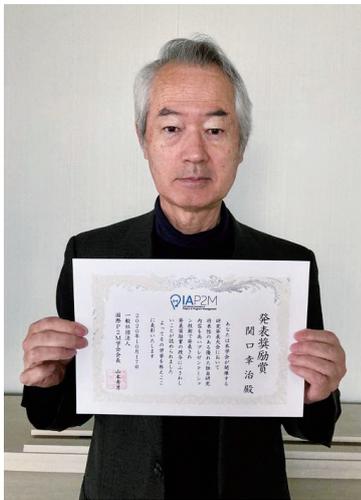


環境情報学研究科の関口幸治さんが国際P2M学会で発表奨励賞を受賞

2020年10月17日に開催された第30回国際P2M学会秋季研究発表大会にて、環境情報学研究科博士後期課程所属の関口幸治さんが「半導体企業におけるプロジェクトマネジメント強化活動の振返りープログラムマネジメント及びビジネスエコシステムの視点の重要性ー」を発表し、発表奨励賞を受賞しました。P2Mとは、プロジェクト&プログラムマネジメント (Project & Program Management) の略称であり、一般的なプロジェクトだけでなく、有機的なつながりを持つ複数のプロジェクト群をプログラムとして統合的に管理する技術です。今回の発表は、国内半導体企業におよそ50年間勤め、後半の約25年間にプロジェクトマネジメント強化活動を主導してきた本人がその活動の振返りを行ったものです。その活動は、プロジェクトマネジメントのベストプラクティスとしてハーバードビジネスレビュー誌から紹介されるまでに至りましたが、ビジネス的には上手くいったとは言えませんでした。



その要因をプログラムマネジメントとビジネスエコシステム(ビジネス生態系)の視点から分析し得られた教訓は、国内製造業にとって有益なものです。これを基に、ビジネスエコシステム構築方法論の研究を進めており、今後の更なる活躍が期待されます。

環境情報学研究科の長谷川琳太さんがヒューマンインタフェース学会「ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム」で優秀発表賞を受賞

2020年10月17～18日にヒューマンインタフェース学会「ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム」がオンライン開催されました。本イベントは、COVID-19の拡大を受け、ヒューマンインタフェース学会の年次大会であるヒューマンインタフェースシンポジウムに代わる新企画行事として開催されました。ヒューマンインタフェースは、人とコンピューターの関わりを研究する分野で、工学、心理学、社会学をはじめとする多種多様な分野からなる学際的領域です。本イベントでは、104件の論文発表があり、そのうちの1件である環境情報学研究科修士課程所属の長谷川琳太さんの研究発表「中途視覚障害者のための関心度の温感提示による対面コミュニケーション支援」が、優秀発表賞を受賞しました。長谷川さんは、環境情報学専攻の市野順子教授の研究室に所属しており、視覚障害者支援システムについて研究を行っています。本研究発表では、晴眼者の関心度を温感を提示して中途視覚障害者に伝えることで、中途視覚障害者と晴眼者間の対面コミュニケーションを支援するシステムを提案しており、中途視覚障害者の社会復帰を支援する重要な研究と考えられます。



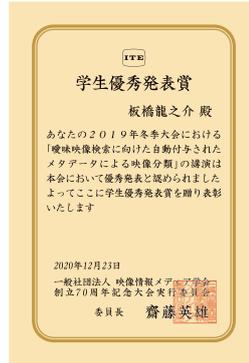
環境情報学研究科の長谷川琳太さん

大学院環境情報学専攻修了の板橋龍之介さんが映像情報メディア学会から学生優秀発表賞を受賞



板橋龍之介さん

2020年3月に本学大学院環境情報学専攻博士前期課程を修了した板橋龍之介さんは、メディア情報学部情報システム学科4年の時から大学院を修了するまでの3年間にわたり、曖昧映像検索の研究に取り組みました。「リラックスしたいときに見る映像を探したい」といった感性的な希望を叶える検索は、「リラックス」のクエリを検索サイトに入力しても、あまりうまくいきません。板橋さんは、このような希望を叶えられる検索を実現するにはどうしたらよいのかを、知能メディア（八木伸行）研究室で研究しました。その成果を、映像情報メディア学会の研究会や国際会議IWAIT2020 (International Workshop on Advanced Image Technology) などで発表しましたが、その中のひとつ、2019年12月12～13日に開催された映像情報メディア学会冬季大会で行った講演「曖昧映像検索に向けた自動付与されたメタデータによる映像分類」が優秀発表と認められ、学生優秀発表賞を、卒業後の2020年12月23日に受賞しました。修士2年次、学生時代最後の発表でした。表彰式は、残念ながらコロナ禍で行われませんでした。表彰状と賞牌が授与されました。



表彰状



表彰盾

「水曜どうでしょう」ファンコミュニティ研究本でテレコム社会科学賞奨励賞を受賞



社会メディア学科広田すみれ教授の著書「5人目の旅人たち —『水曜どうでしょう』と藩士コミュニティの研究—」（2019年、慶應義塾大学出版会）に対し、2020年3月（公財）電気通信普及財団から第35回テレコム社会科学賞奨励賞が授与されました（帝国ホテルで開催予定だった授賞式はコロナ禍で中止）。この賞は情報通信分野における社会科学分野の優れた学術書に対して授与されます。本は、テレビ番組「水曜どうでしょう」（HTB）

のファン21名へのインタビューを核に、なぜこの番組が、特に道外の熱心なファンを獲得できたのかをネットの拡大等による視聴行動の変質という点などから検討したもの。受賞理由は「ローカル番組の成功例というより、『ネット時代の動画配信ビジネスの先駆例と見る方がわかりやすい』という独創的な指摘」が評価され、「読み物風に書かれているが、学術的にも情報通信の振興にとって意義のある業績」とされました（写真は2020年7月の藤村忠寿チーフDをお呼びした講演会時）。

社会メディア学科の岡部大介教授と情報システム学科の大谷紀子教授が 第12回日本質的心理学会学会賞を受賞

メディア情報学部社会メディア学科の岡部大介教授は、同学部情報システム学科の大谷紀子教授と共同で、AI技術がアーティストの創作活動に与える影響を認知科学の視点から分析する研究に取り組んでいます。この研究の成果をまとめた岡部教授と大谷教授の共著論文、「アーティストと人工知能技術の共同作曲に見る創造と省察」が、第12回日本質的心理学会 学会賞（優秀創生フィールドワーク論文賞）を授与されました。AI技術は今後、人間の創造的な学習の文脈において重要な役割を担うと予測されています。上記論文では、楽曲制作に焦点をあて、AIが人間の創造的な活動にどのように関与するのか、詳細なフィールドワークを通して質的に検討されました。今後は、音楽を専門的に学んだ経験のある人たちだけではなく、「ふつうの人びと」が自分の好きな楽曲を入力して、AIとともに自分好みの曲を創造することができるよう、研究を進めていく予定です。



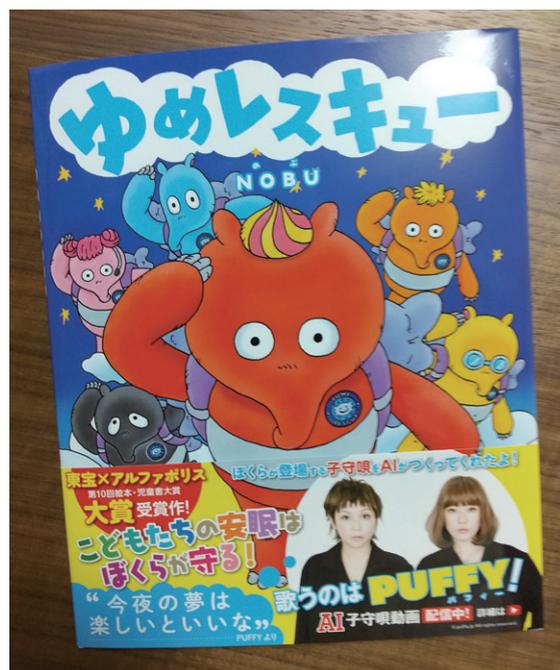
社会メディア学科の岡部大介教授

AIに基づく自動作曲の研究成果が公開されました

メディア情報学部情報システム学科大谷研究室はAIに基づく自動作曲の研究を進めており、株式会社アルファポリスと東宝株式会社によるAI子守唄プロジェクトに参画して、子供たちの寝かしつけに最大限の効果を発揮する子守唄の制作に取り組みました。本プロジェクトは、AIを活用した新時代のヒットコンテンツの創出を目指して実施されたもので、第10回絵本・児童書大賞に選ばれた『ゆめレスキュー』の世界観をベースとしています。全国に古くから伝わる子守唄の特徴をAIが学習して新しい子守唄のメロディを生み出し、PUFFYの大貫亜美さんが歌詞を付けて子守唄「ほうやれば」が完成しました。

<https://youtu.be/w3TflKlk6Og>

また、2020年は楽聖ベートーヴェンの生誕250周年であることから、ベートーヴェンの誕生日である12月16日に東京藝術大学COI拠点が開催するオンライン演奏会「AIベートーヴェン」が開催されました。このなかで、大谷研究室の自動作曲システムにより生成された楽曲を東京藝術大学の小川類准教授がアレンジし、コンテンポラリーダンスと合わせた作品が披露されました。



オンラインオープンキャンパスが開催されました

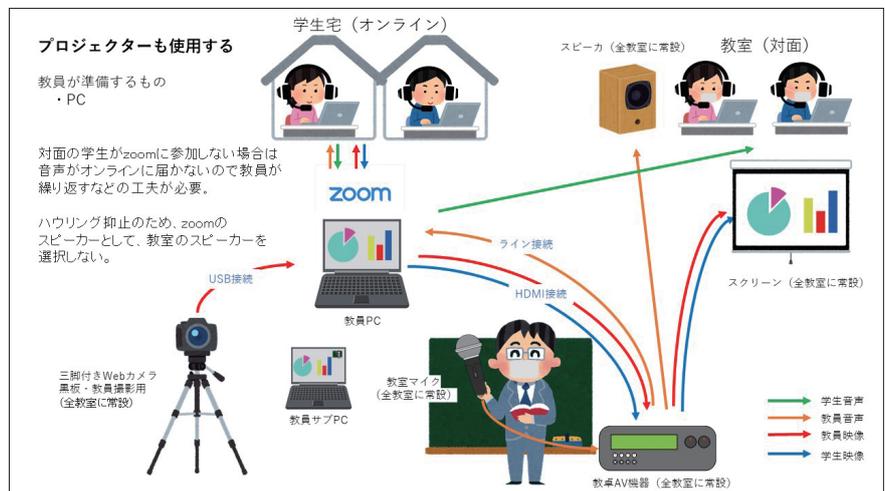
毎年、6月と8月に開催されているオープンキャンパスが、2020年度はオンラインでの開催となりました。Zoomのウェビナー機能を使用して、学部・学科説明、入試対策、体験授業に加え、先生や現役学生に質問したり、現役学生の体験談を聞いたりするコーナーも設けられました。オンラインでの開催は初の試みなので、来場者数は少ないのではないかと心配していましたが、6月21日には1,000名超、8月23日には約3,400名の高校生や保護者の方がご来場くださいました。質問コーナーでは、カリキュラムや入試、学生生活一般に関する質問がチャットでたくさん寄せられました。学生に対して「彼女はいますか?」という質問が投げかけられる場面も。教員による説明を聞くだけでなく、教員同士、および教員と学生の何気ないやり取りを垣間見ることもできたので、各学部・学科の雰囲気が高校生にも伝わったのではないのでしょうか。



情報基盤センターにおける新型コロナウイルス感染症への対応

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大を受けて、学生が共有使用するパソコンやプリンターでの感染を防ぐため、施設設備の使用を制限した運用となりました。そのため、利用者が大学に来なくても基盤センターのサービスを利用できるよう、従来からある遠隔デスクトップシステムやWebClassの拡充や、オンラインで会議や授業をする際に便利なツール（Teams, Zoom, GoogleClassroom等）の導入に協力しました。また、急なオンライン授業の実施であったため、パソコンの準備が間に合わない学生へは、後援会の補助を受けて購入したパソコンを貸与しました。

感染拡大レベルの変化により授業形態も刻々と変わる中、講義も対面とオンラインを併用するハイブリット授業を行うことになり、教卓から講義を配信する際に必要な機材の接続方法を先生方や学生アシスタントを対象に説明会を行いました。しかし、対面とオンライン双方に学生がいる状況での授業では利用する機器の配線や接続が複雑になったため、機材の取り扱いやオンラインツールの得意な学生を募り、授業をサポートする支援員として配置しました。教員からトラブル対処の要請があった際は即座に教室へかけつけて対応する等、大変活躍してくれました。



機器接続方法等の説明会で使用した資料の一部